

1920年代「狂乱の時代」の登場人物たち

間瀬幸江

Mase Yukie 宮城学院女子大学教授

第12回・最終回

うめき声こそは私たちの声 ——「狂乱の時代」を聴き直すために

最近日本版にリメイクされた映画『パリタクシー』（原題 *Une belle course*, 2022）で、92歳の主人公マドレーヌは、若い頃、夫に対する重大な傷害事件を起こし、25年の実刑判決を受けたと、タクシー運転手のシャルルに昔語りをする。常態化していた夫による家庭内暴力は当時情状酌量の対象とならず、控訴さえ許されなかったと聞き、シャルルは啞然とする。しかしマドレーヌは言う。「でもね、そんなに悪い時代じゃなかったよ。ミニスカートとヴェスパとジャズの時代よ。あなたもきっと好きになったわ」。1943年、ドイツ占領下の監視社会フランスで父を銃殺された彼女にとって、1950年代は、夫からの暴力に苦しんだ日々であってなお、相対的に明るい平和な時代でもあったのだろう。

狂乱の時代もまた、百花繚乱の華やかさと、大量殺戮へと連なっていく第二次世界大戦との対比によって、回顧的に「善かった時代」と見なされてきた。しかし、この「回顧」による「懐古」的イメージこそが、その時代の真の登場人物たち、すなわち民衆一人ひとりの、うめき声やため息、さらにはその向こうに広がる声にならない無数の声をないことにしてきたのではないだろうか。

例えば、狂乱の時代の高揚と消滅に寄り添う人生曲線を描いた、キキ・ド・モンパルナス（連載第4回）ことアリス・プラン。「アングルのヴァイオリン」に見立てられた、あの美しい背中の持ち主で、情に厚く、麻薬におぼれ、晩年には「狂女」のような風貌になったキキ。光と影、陽と陰、華麗と悲惨——回顧主義の安易さに思考を委ねる限り、私たちは彼女をこうした両極端でしか捉えられない。

しかし、『パリタクシー』のマド

En route pour Paris, illustration from Kiki's Memories, edition Henri Broca, Paris, 1929.



レーヌがそうであったように、キキことアリス・プランにもまた、親があり、故郷があり、人間関係に翻弄される心と身体があり、懸命に暮らす日常があった。そうした「本当の声」が聴かれる自由を、「素敵なおばあちゃん」のステイタスにたどり着いた一握りの人々にしか許さない発想から、私たちは自らを解放しなくてはならない。真の「聴かれる自由」を互いに獲得して、はじめて私たちは、狂乱の時代をファシズムの単なるカウンターパートとして見る狭隘さから、自由になれるのではないか。狂乱の時代とは、華やかな視覚文化の時代ではあるが、私たちがその時代の人々の声を聴こうとしなかった——実は「悪い時代」とそう変わらないくらいに——時代でもある。

思えば、1920年代を謳歌した人々は、自分たちの時代がのちに「戦間期」と呼ばれることになるなど、考えもしなかったはずだ。私たちもまた、80年以上続いた「戦後」がいずれ、別の名で呼ばれる日が来ることを望まない。この未来の到来に抗うための思考回路とは、見るだけで済ませてきた回顧主義をいったん脇に置き、過去の時代の声に耳を澄ますこと。そして歴史を別の角度からとらえ直すこと。それはとりもなおさず、私たち自身の声を聴き、聴き合うこととも、地続きであるはずだ。

キキの回想録『モンパルナスのKIKI』（河盛好蔵訳）。

1929年に活字として残された、彼女の素朴で正直な声を聴きたい方に勧めたい。「女王」でも「狂女」でもない、自分の気持ちに正直な一人の人間のうめき声がただ、そこに書き記されている。この連載を担当するなかでようやくこの本の読み方がわかった気がするし、キキ=アリスにやっと出会えたような気もする。ひとえに、1年間併走くださった読者の皆さんと編集部の皆さんのおかげである。

大修館書店『英語教育』3月号掲載
転載禁止